

湿地を訪ね、
湿地に学ぶ

湿学のすゝめ

渡良瀬遊水地編

はじめに

名古屋市の南西部、庄内川・新川・日光川の河口部に広がる藤前干潟は、多くの生き物が暮らし、渡り鳥が羽を休める重要な中継地としても知られています。

30年以上前、ごみの量の増加に伴い藤前干潟をごみの埋立処分場にする計画が発表されました。しかし、藤前干潟保全の機運が高まるなか、名古屋市は1999年1月に計画の中止を発表。翌月「ごみ非常事態宣言」を出し、市民総出でごみの減量に取り組むことで、藤前干潟は守られました。

藤前干潟は、2002年11月18日にラムサール条約の「国際的に重要な湿地」に登録されました。以降、藤前干潟では、清掃活動や干潟観察会などさまざまな活動が行われています。ラムサール条約登録から20年。名古屋市では活動をこれまで以上に促進するため、「国内湿地交流事業」を実施しました。本事業は、湿地を保全・活用するための優れた取り組みを行うラムサール条約登録湿地を視察し、そこで得た知見を藤前干潟の活動に活かすことを目的としています。湿地について学ぶことから「湿学」と名付けました。この報告書は、他の地域の湿地の取り組みから何を学び、藤前干潟にどう活かすのか、派遣者の立場からまとめたものです。

事前学習会

視察の前に2回の事前学習会を行いました。
第1回で藤前干潟について学び、第2回で視察先である渡良瀬遊水地についての理解を深めました。

第1回

日付 令和4年12月3日(日)
場所 環境省稲永ビクターセンター
名古屋市野鳥観察館

すべてはここから始まった

ごみ埋立処分場の建設計画により喪失の危機にあった藤前干潟。まずは、NPO法人藤前干潟を守る会の亀井浩次さんから、藤前干潟の保全の歴史を学びました。

かつて、藤前干潟にはごみの埋立処分場を建設する計画がありました。15年の市民活動の末、市民の保全意識の高まり等を受け、名古屋市は計画を中止。藤前干潟は保全されることになりました。2005年の「自然の叡智」をテーマとした愛知万博、2010年に名古屋市で開催された第10回生物多様性条約締約国会議など、この地域の環境を重視する流れは藤前干潟の保全から始まりました。

藤前干潟がラムサール条約に登録され、2022年で20年。

海洋ごみやマイクロプラスチックの問題は、藤前干潟でも課題となっています。藤前干潟クリーン大作戦など、清掃活動は行われていますが、日々ごみが流れ着き、拾うだけでは根本的な解決にはつながりません。美しく豊かな海を次の世代に残していくために、海に負荷をかける行為に目を向け、私たちにできることを行い、社会全体でも対応していかなければならないと訴えられました。

講義の後は、施設の見学や野鳥観察を行いました。



第2回

日付 令和4年12月18日(日)
場所 名古屋環境学習センター
(エコパルなごや)

コウノトリが連れてきた『つながり』

NPO法人わたらせ未来基金の青木章彦さんとオンラインでつなぎ、渡良瀬遊水地の成り立ちや環境などについて学びました。

青木さんが理事長を務めるわたらせ未来基金は、渡良瀬の湿地帯にあった生態系を再生させ、コウノトリが生息できる自然と調和した流域社会システムを構築することを目的として2001年に発足しました。「コウノトリが生息できる渡良瀬の環境を」という目標のもと、様々なつながりが生まれ、そうした活動に取り組んできたそうです。そして、2014年にはコウノトリが27年ぶり

に飛来。写真などを見せていただきながら、コウノトリの生息場所となる環境学習フィールドでの湿地再生の取り組みや、外来種除去の活動などについてお話を伺いました。

現地視察で活動団体の皆さんと意見交換するのが楽しみです。コウノトリのひかるやレイにも会えるでしょうか。視察の前に期待がふくらみます。



渡良瀬遊水地 | 湿地のタイプ：低層湿原、人工湿地

貴重な動植物が生息・生育する自然の宝庫

栃木、群馬、埼玉、茨城の4県4市2町にまたがる日本最大の遊水地です。増水した川の水を一時的に貯水して流域の水害発生を防止するとともに、生活用水を供給する施設となっています。遊水地の面積は約3,300ha（ラムサール条約登録湿地面積2,861ha）。遊水地には1,500haの本州最大の面積を誇るヨシ原が広がり、コウノトリやチュウヒをはじめ、絶滅危惧種を含む多くの貴重な動植物が生息・生育しています。

藤前干潟 | 湿地のタイプ：河口干潟

都会に残された貴重な干潟

大昔より伊勢湾には多くの河川が流れ込み、河口部には広大な干潟が形成されていました。しかし、農地や工場、港湾施設などの開発で次々と埋め立てがすすむなか、最後にわずかに残った干潟が、伊勢湾最奥部に位置する藤前干潟（ラムサール条約登録湿地面積323ha）です。

干潟の泥の中には鳥の餌となるゴカイや貝類などの底生動物が豊富に生息しており、シギ・チドリ類の東アジアーオーストラリア渡りルート上における中継地としても重要な場所となっています。



現地視察 旅の記録



1/14 土 Day 1

JR名古屋駅 → JR小山駅 → 体験活動センターわたらせ → 谷中村史跡保全ゾーン → ウォッチングタワー → ヨシ原浄化施設 → チュウヒのねぐら入り観察

⑤ ④ ③ ② ①

1/15 日 Day 2

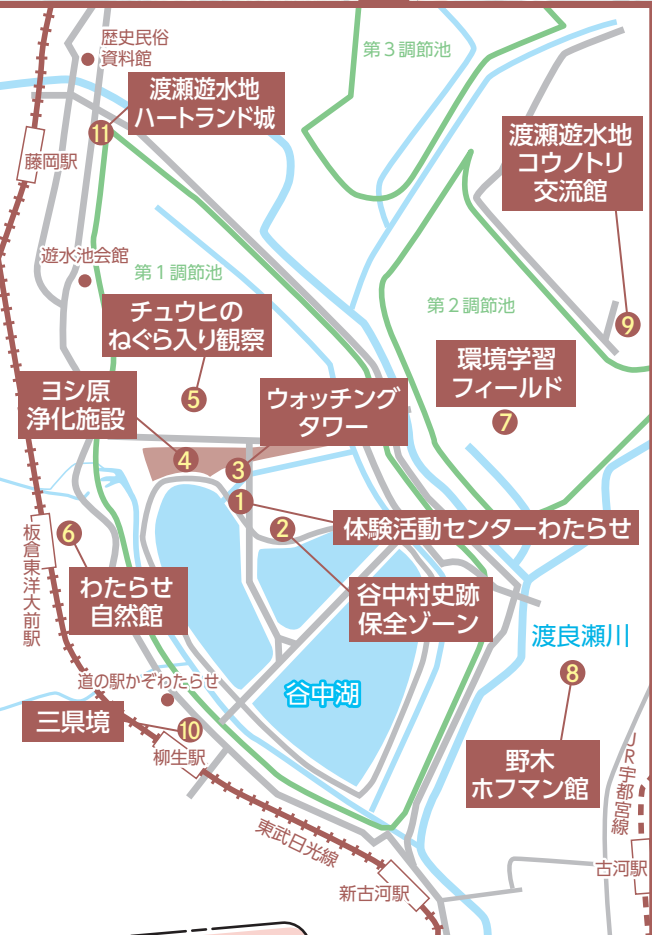
わたらせ自然館 → 環境学習フィールド → コウノトリ人工巣塔観 → 保全活動体験 → 渡良瀬子ども自然塾 → 野木ホフマン館

⑥ ⑦ ⑧

1/16 月 Day 3

渡良瀬遊水地コウノトリ交流館 → 小山市渡良瀬遊水地エコツーリズムガイド協会 講話 → NPO法人わたらせ未来基金 講話 → 小山市自然共生課 講話 → 三県境 → 栃木市渡良瀬遊水地ハートランド城 → 特別展「100年前の渡良瀬遊水地と今」見学 → 渡良瀬遊水地・藤前干潟 意見交換会 → JR小山駅 → JR名古屋駅

⑨ ⑩ ⑪



Special Thanks !

お世話になった皆さま

NPO 法人 わたらせ未来基金

青木 章彦 さん

塚田 啓一 さん

ラムサール湿地ネットわたらせ

楠 通昭 さん

谷中村の遺跡を守る会

高際 澄雄 さん

渡良瀬遊水地を守る

利根川流域住民協議会

猿山 弘子 さん

小山市渡良瀬遊水地

エコツーリズムガイド協会

門馬 悠一 さん

NPO 法人 わたらせ未来基金、
板倉町観光サポータークラブ、
ラムサール湿地ネットわたらせの皆さま
渡良瀬子ども自然塾の子どもたち

小山市自然共生課、
栃木市渡良瀬遊水地課、
加須市環境政策課・北川辺総合支所
地域振興課
野木町政策課の皆さま

お世話になった施設

体験活動センターわたらせ ①

渡良瀬遊水地内



わたらせ自然館 ⑥

群馬県邑楽郡板倉町大字海老瀬 4663-1



野木ホフマン館 ⑧

栃木県下都賀郡野木町大字野木 3324-10

渡良瀬遊水地コウノトリ交流館 ⑨

栃木県小山市下生井 865-1

栃木市渡良瀬遊水地ハートランド城 ⑪

栃木県栃木市藤岡町藤岡 1218-1



谷中村の歴史と渡良瀬遊水地

渡良瀬遊水地の貯水池である谷中湖はハート型の形をしています。貯水池がハート型になったのには深い理由がありました。この理由を知るとは渡良瀬遊水地の成り立ちを学ぶことにつながります。

今の渡良瀬遊水地の場所には谷中村がありました。しかし、明治・大正時代、足尾鉾山の鉾毒対策と首都圏の治水対策のため谷中村を廃村し、渡良瀬遊水地が整備されました。その後、度重なる洪水に見舞われる中、遊水地機能向上のため、調節池化や貯水池化が行われます。そして、貯水池工事のため谷中村の歴史が残るエリアにブルドーザーが入った際、人々は身を挺して工事を阻止しました。その場所が今の谷中村史跡保全ゾーンです。こうして、谷

中湖は当初計画された円形からハート型へと形を変えることになったのです。渡良瀬遊水地の豊かな自然や首都圏の治水機能の向上は、谷中村の人々の犠牲のうえに成り立っています。渡良瀬遊水地では、湿地の自然環境とともに、公害や治水の歴史についても継承する取り組みが行われています。



ヨシ原と伝統文化の保全

谷中湖は窒素とリンが多い水質のため完成当初から異臭と水質汚染が問題でした。ヨシ原浄化施設ではヨシの持つ水質浄化作用を利用して水質改善に取り組んできました。ヨシは谷中湖の富栄養水を吸収して成長するため、水質浄化とヨシの成長を促す一石二鳥のシステムとなっています。しかし、近年、遊水地全体の乾燥化により、成長に沢山の水分が要するヨシはなかなか生育できず、比較的少量の水分で成長するオギが増加傾向にあるそうです。わたらせ未来基金が行うヨシの生育状況を調査する坪刈りの様子を見学するとともに、ヨシ原の状況やヨシ原保全の取り組みについて学びました。

また、遊水地の風物詩ヨシ焼きは、昭和30年代に始まり毎年3月頃に行われていました。立ち枯れたヨシを焼くことで害虫駆除や新芽・他の草木の芽吹きにつながります。また、ヤナギによる樹林化も防止し、生態系維持に大きく貢献しています。伝統あるヨシ焼き文化を保全・継承し、ヨシ原を守ろうとする地域の人々の郷土愛に溢れていました。



1/14+ | Day 1

- ① 体験活動センターわたらせ
- ② 谷中村史跡保全ゾーン
- ③ ウォッチングタワー
- ④ ヨシ原浄化施設
- ⑤ チュウヒのねぐら入り観察

本州最大級の猛禽類生息地

チュウヒのねぐら入りポイントにて、絶滅危惧種であるチュウヒの他、猛禽類のねぐら入りを観察しました。日没間際、普段は見かけることの少ない数々の猛禽類が目の前に飛来し、渡良瀬遊水地が希少な生きものを支える重要な場所であることを強く認識することができました。

首都圏の生活を守る平地ダム

ウォッチングタワーには2019年の台風19号による水位が記録されています。遊水地の面積は山手線の半分程。そこに人の背丈より高い水が流れたという事実には驚愕しました。首都圏にそれ程の水量が一気に流れては大惨事。平地ダムとして担う役割の大きさを知るとともに、ダムの底を歩いていると思うと不思議な感覚になりました。

豊富な生きもの情報を入手

体験活動センターわたらせは、遊水地内にある情報発信基地。渡良瀬遊水地で楽しめる植物や野鳥、昆虫などの生きものに関するパネルや出没情報などが展示され、様々な種類の図鑑が安価に入手できます。ヨシの紙漉きなどの体験学習もでき、双眼鏡などの貸し出しも。

小さな継続が未来に

コウノトリを守りたい、環境を良くしたいという思いが、地道な活動を継続する力の源となり、未来につながっています。環境学習フィールドの整備においては、コウノトリの棲みやすい環境を実現するため、国交省との継続的な折衝・交渉が行われてきました。「渡良瀬遊水地湿地保全・再生基本計画」に基づく掘削事業は、治水機能の向上を踏まえながら、多様な動植物が生息できる湿地環境の再生を目指したものです。視察中、コウノトリのひかるくんが見られ、取り組みの成果が上がっていることを強く感じました。



種が広がっていることを痛感しました。作業は短時間で行うことが、保全活動を長く続けるコツだそうです。ゲームをしているような感覚で、集中して楽しく作業をすることができました。時に泥まみれになりながら一人一人が行う作業は小さなことかもしれませんが、地道に行い、継続していくことが目標達成の力であることを学びました。



1/15 日 | Day 2

わたらせ自然館
環境学習フィールド
・コウノトリの人工巣塔観覧
・保全活動体験
・渡良瀬子ども自然塾の活動見学
野木ホフマン館

⑧ ⑦ ⑥

冬のヨシ原で子どもたちとの交流

ラムサール湿地ネットわたらせが行う「渡良瀬子ども自然塾」は、年間を通して子どもたちに自然体験の機会を提供しています。渡良瀬遊水地の自然や文化を、遊びながら楽しく五感を使って体験することができます。1ヶ月に1回程度、生きものの調査や観察会、地元の食材を使った料理にも挑戦しているそうです。

この日は、「ヨシの秘密基地をつくらう」というプログラムを行っていました。子どもたちは自分の背の高さの何倍もあるヨシを器用に使いながら、思い思いの秘密基地をつくっていました。また、草すべりも行っていて、子どもたちと一緒にプログラムを体験しました。自然の中で遊ぶ機会が減少している昨今、とても有意義な活動だと感じ、



渡良瀬が支えた日本の近代化

野木ホフマン館に隣接する、国の重要文化財「野木町煉瓦窯」を見学。煉瓦の製造に最適な粘土は旧谷中村、川砂は主に思川から採取、渡良瀬の水運により出荷されました。連続し焼けることができる円形窯は大量生産が可能で、明治時代より日本の近代化を支えてきました。天高く伸びる煙突、独特な形をした建物はアート作品。

渡良瀬の自然の恵みを食す

渡良瀬遊水地近くの「新樹屋」で昼食。渡良瀬の天然ナマズを使った、ふわふわの白身の天ぷらと、ナマズの頭や骨をたたいてすり身にしたものに豆腐や味噌などを混ぜて油で揚げた、郷土料理「ナマズの叩き団子」をいただきました。小山市ではナマズの養殖にも取り組み「ラムサールナマズ」としておやまブランドにもなっています。

ジオラマで遊水地を学ぶ

わたらせ自然館には、大型ジオラマや豊富な湿地の植物標本などがあり、直感的でわかりやすく渡良瀬遊水地を学ぶことができます。板倉町観光サポータークラブの方から渡良瀬の歴史や治水機能の仕組みについて説明を受けました。遊水地化のため新流路に通水を開始する当時の写真において、それを見守る人々の様子が印象的でした。



コウノトリに託す想い

渡良瀬遊水地コウノトリ交流館は、情報発信やエコツーリズム推進等のため、古民家をリノベーションした施設。コウノトリへの愛溢れる展示や子どもたちが作った人工巣があり、地域の人々がコウノトリを大切に見守っていることが伝わってきます。ヨシ染めのハンカチなど土産品や寄付型自動販売機が置かれ、水害から身を守る地域特有の「水塚」や「揚船」も見ることができます。

施設運営を行うNPO法人わたらせ未来基金では、流域の環境保全のためヨシ刈りや湿地再生の取り組み、調査活動を行うほか、上流との連携による足尾の森での植樹活動も行っています。また、新たなヨシの活用として、施設内でヨシの腐基土づくりが行われ、寄付金の返礼品にもなっているそうです。様々な人や団体との連携により幅広い活動が展開されていきました。



ヨシ灯りが新たな風物詩に

小山市渡良瀬遊水地エコツーリズムガイド協会では、小山市が実施する「おやま市民大学 渡良瀬遊水地ボランティアガイド養成コース」の卒業生が会員となり、小中学校の校外学習などでのガイドやミニヨシズ・ヨシ灯り制作の出前講座などを行っています。また、協会主催で始めた「ヨシ灯り展」は、今では小山市・栃木市共催のイベントに発展。小学生など市民が思い思いに制作したヨシ灯りの幻想的な光が街を照らし、好評を博しているそうです。桜とヨシ灯りのコラボ企画も検討しているとのこと。遊水地に関わる人づくりの継続的な仕組みや、多くの人を惹きつけるイベントをきっかけに遊水地への興味関心を高める取り組みは目を見張るものがあります。



1/16(月) | Day 3

渡良瀬遊水地コウノトリ交流館……⑨
小山市渡良瀬遊水地エコツーリズムガイド協会・わたらせ未来基金・小山市自然共生課 講話
三県境……⑩
栃木市渡良瀬遊水地ハートランド城……⑪
・特別展「100年前の渡良瀬遊水地と今」見学
・渡良瀬遊水地・藤前干潟 意見交換会

湿地の保全が地域の活性化に

ラムサール条約の3つの柱「保全・再生」「賢明な利用」「交流・学習」に沿って小山市の取り組みについて伺いました。小山市では、湿地生態系の頂点にいるコウノトリが生息できる環境は、環境容量を超えない持続可能な社会のモデルになりうるという考えのもと、湿地の保全・再生をすすめてきたそう。生きものの観察会などの環境学習や外来種除去など湿地保全活動のほか、水鳥や生態系に配慮した「ふゆみずたんぼ」の取り組みといった環境にやさしい農業の推進や、ヨシの保全・持続的な利用のためのヨシ焼きやヨシの利活用による地場産業の推進を行っています。

湿地保全の取り組みを、地域の活性化にもつなげる統合的な取り組みが実践されていました。



古図でみる渡良瀬の歴史

渡良瀬遊水地ハートランド城は、映像やクイズコーナー、ヨシ細工の体験活動などにより楽しく学べる施設。渡良瀬遊水地概成100周年記念の展示企画「100年前の渡良瀬遊水地と今」を開催していました。丁寧に描かれた100年前の古図や、手書きで正確に描かれた昭和初期の測量図など当時の技術者の苦勞が伺い知れます。雨のため予定を変更しての急な見学でしたが、展示内容について解説いただき、100年以上前よりこの地のために取り組む人々の連なりを感じました。

県境にまたがる地

三県境は埼玉県・群馬県・栃木県が接する県境。かつては渡良瀬川の中に位置していましたが、明治から大正の河川改修工事による河道変更で現在の位置に。平地に存在する三県境は珍しく、地元の方が大事に保全してきた場所を行政と連携し観光資源として生かしています。県境にまたがる渡良瀬遊水地の地勢を表す場所でもあります。



渡良瀬遊水地・藤前干潟 意見交換会



渡良瀬遊水地での活動について伺い、意見交換を行いました。

ご参加いただいた皆さま

NPO 法人 わたらせ未来基金

青木 章彦 さん

塚田 啓一 さん

谷中村の遺跡を守る会

高際 澄雄 さん

渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会

猿山 弘子 さん

小山市渡良瀬遊水地エコツーリズムガイド協会

門馬 悠一 さん

ラムサール湿地ネットわたらせ

楠 通昭 さん



渡良瀬遊水地を守った 30年の歩み

渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会の猿山さんは協議会の発足当時から今日までを知るお一人。同会では、リゾート開発や空港建設構想が持ち上がり、それに反対し渡良瀬遊水池を守った住民運動から、ラムサール条約登録への署名活動や行政への働きかけなどを行ってきました。そして、渡良瀬遊水池の自然環境を次世代に引き継ぐための活動に現在も取り組み続けています。配布いただいた30周年の保護活動の記録集には短い時間では語り尽くせない濃密な活動の記録が記されていました。

歴史や文化を継承する

谷中村を廃村して整備された渡良瀬遊水池は、谷中村の人々の犠牲の上に成り立つものです。遊水地内に残された寺や神社の跡などが、かつてここに人々が暮らしていたことを訪れる私たちに教えてくれます。谷中村の遺跡を守る会はこうした史跡を保全するとともに、地域の文化や歴史などの資料を収集・保存し、次代に継承する活動を行っています。藤前干潟においても自然環境だけでなく、保全の歴史や地域の文化も継承していく必要があると改めて感じました。

渡良瀬の ネットワークの中心に

ラムサール湿地ネットわたらせでは、教育・普及啓発として、子ども自然塾やわたらせファンクラブの運営を行うとともに、市民フォーラムを開催するなど多くの団体や人と意見交換し、提言やビジョンの共有化を図っています。渡良瀬遊水池では多種多様な主体が様々な活動をしていることにとっても驚き、このことが渡良瀬の魅力や価値を生み出す源であるように感じました。自由に意見を言い、議論できる場を継続的に開催し続けるその弛まぬ努力に強く感銘を受けました。



主な意見交換内容

次世代への継承に向けて

団体の高齢化や後継者問題、若者の参画は、共通の課題。学校との連携の重要性や、活動に参加した学生が大学生や社会人になって保全活動に関わる可能性があること、また、若者に自身の資料を提供するなど、蓄積した知識や情報を継承しようとする活動者がいることなどを情報交換しました。

また、子どもが自然と関わる機会が少なくなる中、次世代への継承という意味でも、子ども達に湿地を体感する機会を設ける取り組みが大切であることが話し合われました。

ネットワーク強化の秘訣

渡良瀬遊水池は治水施設であり、湿地の保全・再生にあたっては国交省との調整が不可欠。また、関係行政機関や活動団体の数も多く、地道な話し合いの積み重ねがあつて今があることを皆さんの話から実感するとともに、互いの意見に耳を傾けながら、連携により大きな力とし、想いを実現してきたことを感じました。「緩いネットワークとして機能し、みんなが共有できるゴールを持つ。」「共有できるゴールに向かってみんなで燃えること。」という言葉が印象的でした。





事後学習会

視察を終え、事後学習会を行いました。視察を振り返るとともに、今後、藤前干潟においてどのような保全活動を展開できるのかを話し合いました。

■日付 令和5年2月12日(日)
■場所 名古屋市環境学習センター(エコパルなごや)

すぐにできそうなこと

学ぶ

- ・歴史を学ぶ、正しい知識を持つ
- ・他の湿地の取り組みを調査する

伝える

- ・ゼミやサークルで発表する等大学内で発信
- ・底生生物や野鳥の飛来数などの継続した調査・発信
- ・干潟の様子を撮影し、ブログで発信し、藤前干潟の記録とする

いつか実現したいこと

イベント等の企画

- ・歴史や文化・生活史からの視点で藤前干潟を取り上げる
- ・旅行者と連携して、旅行商品としてツアーを企画する
- ・大学生向け、社会人向けのイベントを企画する
- ・藤前干潟ならではのお土産開発

ネットワークの強化

- ・活動に関わる年齢層、団体、企業を増やし、人のつながりを強化する

参加する

- ・清掃活動などの保全活動、自然観察会、イベントに参加する
- ・プラスチックの被膜肥料を使用しないなど、身近な行動を変える

活動する

- ・ポイ捨て禁止の張り紙を掲示
- ・多くの人の目につきやすい場所です藤前干潟の魅力を発信



教育

- ・子どもの遊び場のような場所にする
- ・小中高の校外学習を働かせる

保全

- ・市内小学校でのチラシの配布
- ・環境学習において藤前干潟の魅力を家族に説明をするという課題を設ける
- ・ヨシを活用した環境プログラムを考える

- ・学生が藤前干潟の活動に参加するよう大学に働きかける
- ・企業に勉強会の場・学習内容として藤前干潟を活用してもらう
- ・湿地教育のための教師等の学びの場を設ける

今後に向けたメッセージ

事後学習会の最後に、NPO 法人わたらせ未来基金の青木さんと NPO 法人藤前干潟を守る会の亀井さんに、メッセージをいただきました。

青木さんからは、藤前干潟においてはごみが大きなテーマとなっており、取り組みを展開するにあたってはどうテーマにつなげていくことができるかを考えると良いのではないかと。また、まずはできることを始めて、地道に広げ、大きく育てていくことが大切であり、その時に多くの人々が共感できる目標をもつことが必要というお話をいただきました。さらに、環境教育やヨシの活用など、湿地間で交流を続けていけると良いですね、とメッセージをいただきました。

亀井さんからは、派遣者から出された様々な提案について、マンパワーや制度上の問題などをどうブレイクスルーしていくか、藤前干潟を様々な人や切り口で考えていって欲しいというメッセージをいただきました。

国内湿地交流事業を通じて得た知見やネットワークを今後の藤前干潟での取り組みに活かしていきたいと思います。

派遣者 (50音順)

年齢も職業も違う 10 人が湿地についてともに学び、この報告書を作成しました。

池端 伸浩 今井 彩月 加々美 薫 亀井 浩次 岸 晃大
北川 大慈 小出 恭司 山口 紗香 油井 孝夫 渡辺 毅

発行/名古屋市環境局環境企画課

〒460-0008 名古屋市中区栄一丁目23番13号 伏見ライフプラザ13階
TEL 052-223-1066 FAX 052-223-4199

発行年月/令和5年3月

